副作用の災難

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
副作用の災難

【Ｎコード】
Ｎ２３２４Ｄ

【作者名】
都神紗茅

【あらすじ】
拙作『副作用の賜物』の続編小説です。その為、本編を読んでからこちらの話を読むことをお薦めします。

1

「はい、これ」

そう言って赤みを帯びた茶髪の少女は、ストレートの黒髪を持つ少女もとい少女に見える少年にトートバッグを差し出した。

「な、何だよこれ」

訳あって今は性別の変わっているのは、実はあの有名な高校生探偵こと工藤新一。今この時は“あいり”と言う名前で過ごしている。

彼女”が元の姿に戻れる薬を、赤みを帯びた茶髪の持ち主こと灰原哀が完成させるまでの間、哀の家――詳しく言えば、阿笠博士の家――あいりは滞在させてもらっている。その長いようで実は短い期間は、一週間。

「はい、お財布。中に入ってるメモに買ってくるものを書いておいたから、駅前のスーパーまで行ってきて。分かった？」

「だから、何でオレが」

あいりは今日、丁度この前蘭と行ったショッピングモールで購入した服をに身を包んでいた。最近は自分が持っていたのとそれを交互に来ていて、偶然今日は女物の方の日であった。

「あら。今は博士が学会に行ってて私とあなたしかいないんだし、手が開いているあなたが行けばいいんじゃない？」

「そりゃそうだけど」

「じゃあ断る理由はないでしょ？」

お使いを断りたい理由はただ一つ。今の姿で外を彷徨(うろつ)きたくないのだ。だけど、副作用の解毒剤を作ってくれているのは哀だ。

あいりはとりあえず哀の持っているトートバッグを受け取り、玄関に歩いていった。　あいりは渋々玄関の床側に座り込み、慣れないブーツを履く。性別が変わって靴のサイズが小さくなってしまい、今のあいりにはそれしか足に合う靴がないのだ。

後ろに哀の視線を感じながら、あいりは玄関の扉を開けた。そして、重い足で一歩を踏み出した。

「ねぇ、あの人、凄く綺麗じゃない？」

「髪さらさらだし、スタイル良いね～」

（ったく、これだから外を歩くのは嫌なんだよ）

駅前のスーパーで、あいりは手にメモと買い物かご、トートバッグを持って野菜売り場にいた。何でもないように振る舞っているが、実際はかなり恥ずかしい。周りがじろじろ見てきていたからだ。
あいりは、もし自分が本当に女なら、素直に喜んでいたかもしれないと思っていた。だけど、今のこの状況ではそんな感情は皆無である。

（買うモン買ってとっとと帰るか）

再度、メモに目を落とした。そこに書いてある字が、どこか遠い他の星の文字に見えてきた。

「やっと終わった……」

トートバッグに商品をそれなりに綺麗に入れ、博士の家に向かって駅前通りを歩いていた。そこからはみ出ていた葱（ねぎ）が、あいりの歩調に合わせて上下に揺れている。

「ねぇ、暇？」

そんな中、あいりは後ろから自分にまっすぐ向かってきた声を聞き取った。何か良からぬことを考えているような男の声だとすぐに分かった。

あいりは完全に無視して早足を始めたが、後ろから速まる足音が聞こえ、追いつかれて肩を掴まれたため嫌々振り向いた。

そこには、二人の男がいた。大体（ハタチ）二十歳で、大学生らしき風貌であった。

1（後書き）

年内に第一話を投稿できてよかったですσ（∇｜　）。もしかしたら第二話の投稿は来年になってしまうかもしれないですが……。今作は『旧・副作用の災難』とは話の内容が大分違うものになっています。その為前後編ではなくなってます。

2

今すぐに逃げないと。このままここにいたらやばい。そんな直感があいりの中を駆け抜けた。しかし大学生らしき男に肩をつかまれていたせいで、身動きが取れなかった。

「オ……じゃなくて、わ、私、暇じゃないんですけど。むしろ急いでるんです。見て分かりませんか」

「まぁまぁ、そんなこと言わないで。一緒に遊ぼうよ」

そう言って大学生はあいりの肩に手を回した。そんなあいりの全身には、一瞬にして悪寒の軌跡が広がった。

「ちょっと、離して下さいっ」

離せって言ってんだよ、バーロっ！　そう言いたい口を抑えつつ、あいりはありったけの力をこめて、大学生の手を振り払った。そして、それと同時に走り出した。

ブーツのヒールが、アスファルトのすき間に食いこむ。あいりはそれを感じとりつつも、先に進もうと言う気持ちで更に走っていった。とりあえず二人の大学生から離れてしまおうと。さっさと帰りたい。

「あ、ちょっと！」

大学生の声が届いたところで『彼女』は立ち止まることなくそのまま駆けていった。バッグから覗いている、左右に揺れて落っこちそうな葱を多少気にしながら。

そんな中あいりは、前をよく見ていなかったために、誰かと衝突してしまった。

アスファルトで塗り固められた地面とともに、バッグの中の葱が宙を舞うのが目に入ってきた。

「キャッ！」

「わ、わり……いっ？」

あいりはブーツのせいで変にバランスを崩してしまっていたものの、転びはしなかった。『彼女』がやっと体勢を立て直したところで顔を上げた先にいたのは、園子だった。

だからと言って、あいりはここで何かをしゃべるわけにもいかなかったので、すぐに道路に散らばっている物を広い集めた。

「あの」

「大丈夫です！　大丈夫ですから、構わないで下さい」

はぁ、と少し戸惑いながら言った園子の顔を見ないように、あいりは荷物をさっさとまとめた。そして再び駆け出した。片足に一瞬走った鈍い痛みさえ、忘れてしまうくらいのスピードで。
そんなあいりの後ろ姿を見つめながら、園子は呟いた。

「あの子、なんか新一君に似てる」

ま、何となくだけど。そのつけ加えた言葉は、園子の心の中だけに響いた。それをただの気のせいだと取ったために、すぐにどこかへと姿を消した。まさかそのあいりが
「新一君」だとは全く気づかずに。それから彼女は、あいりが駆けていった方向と逆にすぐ歩き始めた。

一刻も早く、あの家の中へ。あいりがそんな思いを抱(いだ)いたのはついさっきに始まったことではなかったが、それは園子から離れきった時からだんだんと強くなっていた。
『彼女』は最終目的地である博士の家にやっと到着して、玄関に飛び込むやいなや座りこんだ。もはや自分がスカートをはいていると言うことも忘れて、がに股で。
そんなあいりの姿を見つけて、哀が後ろから声をかけた。

「おつかいご苦労様。どうでも良いけど、仮にも女の子なんだから

スカートぐらい気にしたらどう？」

「誰も見てないんだし、別に良いじゃねぇか。……さっきから、ずっと足が痛(いて)ぇんだよ」

工藤新一の心情がたっぷり染みこんだあいりの言葉を耳にして、哀はサンダルを突っかけて玄関のコンクリートの上に降りた。そして、お互いに支えあっているために倒れそうで倒れないブーツの近くに投げ出されているあいりの足を見た。

かかととつま先の一部分が赤くなっていた。

「その慣れない靴で大分走ったでしょ」

「あぁ、まぁな。思い出したくもねぇけどよ」

そう言ったあいりに哀は、くすりと微かに笑みを浮かべた。そしてその姿に不快な表情をあらわにした『彼女』に、サンダルを脱ぎながら一言だけ残した。

「女の子も大変だって分かったでしょう？」

「それって」

ショッピングモールで蘭があいりに言ったのと同じ言葉だった。

『彼女』の脳裏に、蘭の笑顔が消えては浮かぶ。彼女の元に戻った

と思いきやまた待たせている自分を思い出して、代わりに、哀に反論することを忘れた。
そんなあいりを知ってか知らずか、哀は振り向かないままにリビングへと戻っていった。

ちょうどその頃、園子が蘭に電話をかけていた。

3

その話題は、いつもの何気ない会話のすき間からひょっこりと姿を現した。

『そう言えばさぁ、今日駅前で新一君に似た女の子を見たのよ』

「新一に？」

蘭はそれを聞いて、受話器を持つ手に思わず力が入った。園子の言葉に出てきた、新一に似た女の子と言えば一人しか思いつかなかったからだ。

『あいり』である。蘭はカレンダーを見てみると、例の事件から五日経っていると分かった。彼女は、初めて出会った日以来『彼女』とは一切連絡を取っていない。正直、今すぐに声が聞きたいと言うわけでもないからだ。どこかへ行ってしまった人はもうそばにいると分かったからかも、と解釈をしていた。

『ほんと、新一君をそのまま女の子にしたみたいな感じの子だったのよ。まさかここまで似てる人がいるなんて思ってもなかったわよ』

やっぱり、と蘭は真っ先に思った。彼女の九割ほどの確信が入っている容器が、完璧に満たされた瞬間だった。もはや、答えあわせは必要なかった。

蘭が言葉を発した瞬間、思わず彼女の口からは笑みがこぼれてい

た。

「そうなんだ」

『何、なんか変なこと言った？』

「……ううん、全然。多分ね、その子は新一のい」

蘭はそのままのノリであっさり『あいり』を紹介しそうになったが、言葉の途中で気づいた。実際は存在しない『あいり』の存在を、もろもろの事情を知らない人物に教えてはいけないのではないかと。本人の性格からして、女の子ライフを楽しんでいるともまったく考えられなかったからだ。

『……い？』

「い、一切関係ないと思うよ！　多分、園子の気のせいだよ」

『んー……』

けっこう似てると思ったんだけどな。残念そうにそう言って、園子はその話題に終止符を打った。うんうん、そんなに似てる人なんかなかなかいないって、と蘭もさらりと答える。実際、心の中では『あいり』の姿がはっきりと浮かんでいたが。そして、その残像は、顔をかすかにほてらせながらある言葉を口にしていた。

（今度会う時は、な）

『あいり』との別れの日から、何度その言葉が脳内で流れたことだろう。蘭はそれさえも分からなくなっていた。前のような、どこかぼんやりとしている約束とは違って、今存在しているのは確かな感触があるからだ。

『らーん。……蘭？』

そんな中、蘭はすごい勢いで現実に引き戻された。電話の向こうの園子は、少し機嫌が悪くなってしまっていたように思えた。

「え、なんか話してたっけ？」

『だから、今日わたしが行ったデパートでの話！　ほら、バーゲンやってたって』

「あ、ごめん」

もう、と言って園子は話を再開した。まるで何事もなかったかのように。

それでも、蘭の中から『あいり』の姿が消えることはなかった。そして『彼女』に対する様々な思いも同じく、時が経つに連れてより強くなっていった。

3（後書き）

今回は、あいりさん未登場の繋ぎ的な話になっています。ちなみに蘭は今回だけでなく、ストーリーにも関わっていく予定です。園子はまだ考えていませんが、出来れば再登場させようとは思っています。

4

「はーいーばーらっ」

あいりは朝日の射しこまない地下室を覗きこんで、中にいる灰原（哀？）に声をかける。

「お先にどうぞ。あと――解毒剤の方は、もう少しだから待っててくれる？」

「あぁ。やっぱり、そうだよな」

解毒剤が、簡単に、そしてすぐには作れないことなら分かっている。それでも、期待せずにはいられなかった。

いつの間にか、食事の時を知らせるついでに現状を伺うことがあいりの日課になっていた。まだそうなってから三日しか経ってはいないが。

さすがに嫌気が射したのだろうと判断して、

『彼女』は扉を閉めかけた。

そんな時に重要な一言を思い出し、扉を止めた。

「急かしてるオレが言えることじゃないかもしれないけどさ、あんまり無理すんなよ？」

「あなたのためじゃないわ」

背を向けたまま即答した哀に、あいりは思わずたじろぐ。
そんな『彼女』の様子を察知したのか、哀は静かにつけ加えた。

「やっぱり、私も食事にするわ。何だか作業が捗(はかど)らないし、気分転換に」

「……じゃ、ここのドア開けとくぞ」

ええ、と頷(うなず)いた声に、あいりは階段を登り始める。全くもって哀の気持ちが分からぬままで。

「ごちそうさま」

誰よりも早く食事の終了を告げたのは、哀だった。彼女はあいりと博士の視線を気にすることなく、使用済みの食器を手早く片付ける。
全ての皿を洗い終えると、彼女は何もなかったかのようにまた地下室へと向かっていった。

哀の後ろ姿が扉の向こう消えるまで目で追ってから、順を追ってあいりは話し出した。

「灰原のヤツ、何か変だよな」

「そうかのぉ？　ワシにはいつもと変わらんようにも見えるが」

博士との間にある溝を感じて、あいりはまた食事に戻った。オレの気のせいならいいけど、と思いながら。しかしながら、やはり何かが違う気がした。態度や語調はいつもと変わらないのだけれど。

そんな中、室内にチャイムが響き渡った。

「こんな時間に誰じゃろう」

こんな時間とは言え、朝の九時半だが。心の中で突っ込みをしつつ、あいりは博士の背中を見送った。居候している立場であるが、この姿で知り合いに会ってしまったりすると後々面倒だから。特に、次に会う時には元の姿で、と約束した蘭とは。

「蘭くんに園子くん？　どうしたんじゃ、急に」

『彼女』の頬杖していた体勢が、一気に崩れた。思わず椅子から立ち上がっていたのだ。

蘭はともかく、いや、ともかくでもないけど。園子にはどう説明するか？　自分以外に誰もいないダイニングで、あいりは決断を迫られた。

４（後書き）

基本的に亀更新な作者ではありますが、この作品に限っては特に放置していました。
気付いたら二ヶ月も……＾＾；
実はもう一作品、色々な意味で危ういものもあります。

……この作品の話に戻します。

放置していた理由は私生活がより忙しくなったことが一番ですが、蘭と園子の再登場をどうしようかと迷っていたこともありまして。

前者は解決不可能ですが、後者は解決しました。
これからラストへと向かっていきます。

ちなみに、微妙なところで区切ったのはわざとです。

では。

２００８．５．６　追記。作者@都神紗茅

5

「き、今日はどうしたんじゃ？」

そう言った博士の声は上擦っていた。彼は嘘を吐くのが苦手なのだ。

園子はそんな博士を不思議そうに見つめていた。諸般の事情を知る蘭は、園子が何か言い出す前にさりげなく口を開いた。

「化学の宿題で分からないところがあるから、博士に教えて貰おうかと思って来たんだけど。忙しかった？」

蘭は、少し焦っている博士を落ち着かせるように言った。園子がもしあいりと鉢合わせしその正体に気づいてしまったら、複雑な事情を話さなくてはいけなくなる。そんなことを瞬時に思ったのだ。

蘭の言葉で、博士は我に返った。

「あ、そういうことじゃったのか。ワシで良ければ教えるぞ」

だけど、片付けをするから少し待っててくれ。そう言って博士はリビングに入っていった。

「新一君、急いでどこかに隠れてくれ」

「どこかって言われても……」

博士の家のリビングはキッチン・ダイニングと繋がっている。その上、リビングから出るには蘭や園子がいる廊下を通らなくてはいけない。いやでも、無理やりに通って「工藤新一のいとこです」と適当に言って逃げてしまおうか？　それでも何とかなりそうな気がする。

そんなあいりの思考を読み取ったかのように、哀がひと言ポツリと呟く。

「気障なあなたのことだから、彼女に次に会うのは工藤新一の姿で、とか約束とかしたんじゃないかしら」

「う」

大体合っている。よくよく考えたら、自分の希望は正にそれだ、とあいりは思った。次に蘭と対面するのは本当の姿で、偽りのない状態で、ちゃんと会いたい。色々と話したいこともあるから。それだけではないけれど、やはり今は会わずにいた方がいいのだとも思う。

「なら、あなたのプライドのために隠れた方がいいわね。彼女たち

が部屋に入ったら、キッチンの扉から廊下に出てみるのはどう？
見えないように、博士と一緒に出るとかね」

「それなら平気じゃな。じゃあ、哀君に蘭君たちが入ってくるところの扉を開けてもらおうかの」

「分かったわ。じゃあ、早く博士の向こう側に隠れて」

「へいへい……」

「そっちからちゃんと見えないようになってるかの？」

「工藤君がもう少ししゃがめば大丈夫そうよ」

当事者である自分を置き去りにして、二人が勝手に決めていくのをあいりは見ているしかなかった。

こうして無事にあいりは廊下から別室に逃げ出すことには成功した。
ただし、急に博士がキッチンから出て行くのを若干不審な目で園子が見ていたことは言うまでもない。

「何か今日の博士、ヘンじゃない？」

化学の問題集を解きながら、ふと園子が呟いた。黙って問題と対面していた蘭も、思わずシャープペンシルを動かす手を止める。どこがどのように”ヘン”なのかは蘭でもすぐに説明することが出来る。だが、説明するわけにはいかない。

「別にいつもとは何も変わらないと思うけど」

「そうかなぁ？　何か、わたしたちに言えないこととというか、隠し事？　みたいなのがありそうな気がする」

大体合ってるわ……。考えすぎじゃない、と何とか笑いながら言いつつ、蘭はそんなことを思う。園子

は蘭の言葉に、どこか納得がいかない、とでも言いたそうな表情を浮かべている。まぁ、その気持ちも分からなくはない。博士は嘘をつくのが苦手なのだから。それは蘭がよく分かっている。
考えすぎかなと園子は思い、ふと時計に目をやると、１７時３０分であった。

「ヤバ！　もうこんな時間。今日は姉貴と出かける予定があるんだった！」

園子は荷物を大急ぎでまとめ、ごめん蘭、また今度、と言い残してリビングを飛び出した。扉は音を立てて勢いよく閉まり、その数秒後に、お邪魔しましたという園子の声が聞こえた。
そんな園子にらしいなぁ、と思いながらも、蘭は両手を上に伸ばしあくびをした。とりあえず終わらせておきたいところは全て終わったし、分からなかったところも博士に教えてもらったので、キリがいい。そろそろ帰ろうかなと思い始めた。
ちょうどそんな時に、博士がひょっこりと顔を出した。

「スマンのう、蘭君」

「大丈夫。園子、新一がいることには気づかなかったみたいだし。博士が何か隠しているんじゃないか、とは言ってたけどね」

くすくす笑いながら蘭は言う。博士も先ほどまでのことを思い出して苦笑している。嘘をつくのが苦手だという自覚があるのだ。

「じゃあ、わたしもそろそろ帰るね。夕ご飯を作らなきゃだから」

「そうか、分かった。」

荷物をまとめ、立ち上がったところで、蘭は思い出したかのように博士に言った。

「あの、博士。新一に言っておいて欲しいんだけど」

この言葉が本人にも聞こえてたらいいな、と思いながら言う。本当は直接言いたいところだけど。新一が次に会うときまで、と言っていたので、それを大切にしたいと蘭は思っていた。

「次に会えるのをちゃんと待ってるからね、って。伝えておいてほしいの」

「おお、ちゃんと言っておくよ。最も、新一君がどこかで聞いてるかも知れないがな」

その言葉が実は合っていることを、こっそり聞き耳を立てていたあいりとその現場を目撃していた哀は知っているのであった。

5（後書き）

お久しぶりです。なんと４話から約２年ぶり（だったかな？　間違ってるかもしれません）の更新になっています。ここまで放置しているので、この物語の存在すら知らない方のほうが多いんじゃないかなと思います（苦笑）。

「副作用の災難」は、この５話で一応最終回となります。改めてここで説明しておくと、この物語は、本編扱いの「副作用の賜物」１６話の、『あいりが笑顔で言うと、蘭もまた笑顔を返した。～哀のメールの通り』の～（空白）部分にあたるものになっています。続編とかスピンオフとは違う、追加エピソード？なる扱いです。

本編を読んでからでないと話がよく分からないと思うので、本編からまず読むことをオススメします。……こんなようなことを前にも書いたような気がしますが。

２０１０．０３．１４　　都神紗茅

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2324d/

副作用の災難

2010年10月10日02時28分発行